
黒の死神

hikaru

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒の死神

【Nコード】

N1965P

【作者名】

h i k a r u

【あらすじ】

ここに西大陸最強とまで言われた男がいた。

黒の死神、そう呼ばれた。

その黒の死神が北大陸の学園で学園生活と任務をこなしていく。

黒の死神だということを隠して・・・

しかし途中でばれてしまう。

異能、能力、魔法による学園バトル。

プロローグ（前書き）

世界観を最初に紹介します。

プロローグ

～プロローグ～

多くの人は体の中に魔力というものがあることが判明された。それにより世界で『魔法』と呼ばれる物が認知された。それによる武力の争い。これまで以上に増えた

2×××年、世界は第4次世界魔法大戦がはじまった。
この結果、多くの人が死ぬことになった・・・

20年後

この大戦が終わった。

だが、世界では通常、魔法ではありえない特殊な力を持つものが生まれた。

人であって、人とは違う存在として。

この魔法以外の特殊な力を持つものを異能者と略称された。

異能は生まれつき持っているもの。

突然、発見されるもの。

しかし、戦争は終わったものの、争いが減ったことではない。

それから、100年後・・・

海で離れていた大陸も1つの大陸になった。

世界は1つのまとまったのだ。

しかし・・・

異能者による殺害、魔法による殺害は減らなかった・・・

そのため、政府はガーディアンと呼ばれる機関をつくった。
そこで働く者をヴァルキリーとよんだ。

そのヴァルキリーの最強の称号を剣聖といった。

その剣聖にはその証として、聖剣と呼ばれるものが渡される

多くの魔力を持つ者、異能の力を持つものはヴァルキリーになることを目指した。

その中には剣聖になったものも・・・

プロローグ（後書き）

下手ですが読んでくれた方ありがとうございます。

初めての作品でうまく表現できないことがあるかもしれませんが。
これから直していきたいです。

第1話（前書き）

続いて投稿です。

最後まで読んでもらえるとうれしいです。

第1話

『はあ、やっと着いた』

俺は溜息をついた。

ここはヴァルキリー育成学院だ。

名前のとおり、ヴァキリーを育成するための学院で数は少ししかないためここに通う人は、多い。いや、多すぎる……。

おおくの新生が学院の訓練場に向かう。

俺は、校門の前にいる。

この学院の名前はアブソリュート学院。大陸に5つしかない中のエリートが通う学院だ。

そう、俺も新生だ。今年からこの学院の生徒だ。

俺に視線を向ける人は少くない。

長い黒いコートに黒いズボン、コートのなかにも黒い服、そして黒いピアス、黒い手袋、そして黒い靴、いった通りほとんどが黒の色だ。そのなかに少し違う色があるだけ。

肌がでている所は顔だけ。それで、見る人が多い。

夏でもこんな感じで1年中こんなかんじだ

そんな中、俺も新生の列の中に混じっていく。

向かっているのは、訓練場だ。毎年、ここで入学式が行われるらしい。

『訓練場も広いなあ……』

俺は感心していると。

大きな声が響く。

『これから、入学式をはじめます。しっかりと話を聞くように。』

先生らしき人がいった。

これから、入学式が始まるようだ。

校長先生は意外と若く見える30代くらいか。

『みなさんは、ヴァルキリーを目指していると思います。．．．それ意外でも、目指しているものはあると思います．．．それにむかって．．．』

長い話を聞き流し、俺は新入生を見回した。

ざっと、500人はいるのだろうか。ほとんどの人が背丈ほど剣や細身の剣、槍などを持っている。俺は武器は今、もっていない。

『これで入学式をおわります。新入生は1週間後からの登校となります。その日にクラス分けテストとなりますので準備を整えておいてください。』

さて、やっと入学式は終わった。

俺は、ここに通うために学生寮にむかっていた。

寮は意外と近く2、3分で学生寮に着いた。

『近いなあ。』と俺は小声で誰にも聞こえないように話したつもりが．．．

『そうだよなあ。ここって学園とすごい近いよね？君って黒色ばかりだね、暑くない？？』

少女。おそらく、新入生が聞こえたらしく、答えてくれた。

『え！？』

俺は少し裏返った声でいった。

『あ！ごめんね。わたしはカレンだよ。よろしくね。えーと、君は．

．．．』

『俺は如月キリトだ。君．．．カレンも新入生だよな。』

『うん。そうだよ。』

カレンはうなずいた。

カレンは白と赤が目立つ服を着ている。たぶん学院の制服だと思う。身長は、155cmくらい。結構、細身な体格だ。

俺よりもかなり小さいからか、上目遣いになる。

『君？今小さいとかへんなこと考えなかった？』

『いやかんがえてないよ』

意外に鋭い・・・

そして寮に入る。

あれ、カレンも俺の部屋のほうになのか？

俺はそう思った。ここって男女同じ寮なのか・・・

『あつ！如月クンってわたしの隣の部屋なんだっ！』

微笑みながら聞いてきたのでつい、

『そうみたいだな。』おれも笑ってしまった。

『同じクラスになるといいな！まあ、よろしく頼むよ。』

『うん。なるといいね。じゃあ今夜はおやすみっ』

俺はすぐに時計をみた。もう、9時を回っている。

そつえば、入学式は7時ころからだったからなあ

『おやすみ』

俺は答えて部屋に入った。

部屋は何も置いていない。

そのせいか、部屋が広く見える。

『やっぱり、ひろいなあ』

俺は自分の異能の力を使って、ベッドや一通りの家具を揃える。

俺は、もちろん黒のベットに横になった。

『はあ、今日はいろいろなことがあったなあ』

そう思っていると、俺は疲れたせいかだんだん眠気が強くなっていく。

魔力をつかって、電気を消した。

今の世界で魔力の少しも持たない人は存在しない。

なので、こういう魔力をつかった物は普及している。

『明日はどうしようかなあ』

そんなことを考えている

だんだん、睡魔に襲われていく・・・

第2話（前書き）

是非、最後までご覧ください。

第2話

『ここってどこだっけ？そろそろ着くと思うんだけどなあ』

俺はコートにしまつてあった地図を取り出した。

アブソリユート学院つと。ここか。そろそろ、あと1kmか。

俺は、木造建築が多く立ち並ぶ一直線の道を歩く。

周りには今では珍しい木でほとんど作られている。昔の映画でできそうな風景だ。

『今は12時か・・・昼食でも食べるか』

『どろぼうお！！』

急に大きな声が店から響いてきた。

俺は声がした方向を向いた。ほかの人も一斉に声の方を向いた。

そこから、カバンを持った顔を隠した人が出てくる。

しかし、泥棒は気にしない様子で走りだした。

しかし、誰も捕まえようとははしない。

ほとんどの人が泥棒の通る道をあける。

それは、一般人が戦っても勝てるわけがないからだ。相手の腰には武器らしきものもある

からだ。魔力も平均くらいあるようだ。

それを察したのか、やはり捕まえるものはでない。

泥棒は俺の近くまで来ている。

俺も道の脇によける。

しかし、俺は足を泥棒の足にひっかけた。

そのため、泥棒はかっこ悪く道に転ぶ。しかし、泥棒は、すぐに立ち上がり俺をにらみつける。

そして、泥棒は、腰にあった長方形の物を取り出す。男はそれに魔力を流し始めた。

すると、本来の形を取り戻したかのように、膨らんで剣、刀に近い形のようなものへと姿を変える。

男は距離をとり、刀を構え始めた。

俺は、武器を構えていない。

男は魔方阵を作り、刀に炎をまとわせた。炎剣というところか。

男は、すぐに殺すように刀をふってきた。しかし、俺は右にかわし後ろへと跳び、男の刀

をかわし続ける。

『クソっ！かわしてばかりかよ！』

男はイラついたように声をだした。

しかし、俺はまだかわし続ける。また、男は距離をとった。

男は左手を前に出し魔方阵を作り出した。雷の魔法を出すつもりか。

『サンダーショット！！』

魔方阵から小さな雷がまっすぐに飛んでくる。

ビリッ！！

小さな雷の当たった音がした。それとともに砂煙が上がった。

『あたったか。フッ』男は、少し笑った。

『あんたの魔法はこの程度か？？』

俺がそういったあと、男は驚愕の顔を浮かべる。

『ナイフで消したのか』

男は俺の袖から少しでている刃物の先を見た。

『この程度なら、学生でも防げるぞ』

『ちっ！』

男は、すぐに魔方阵を作り出し、魔法を唱える。

『燃えろ！ファイヤーボール！！』

炎の玉が向かってくる。大きさは30cmくらいだ。

しかし、俺は、再び魔法を防いだ。この程度なら、何回でも防げる。

男は、俺が防いだ直後、炎をまとった刀で切りつけてきた。

俺は、すぐに後ろに跳んでかわす。

手に魔方阵をつくる。その風の魔法で風を操る。

『ウイング・ショット』

風は男を後ろの木の木造の家の看板に当てた。

俺は男に近づくと 男はしゃべり始めた・・・

『黒い長いコートにズボン、両耳にピアス。お前が黒い死神か・・・噂には聞いたことがあ

る・・・ヴァルキリーにも劣らない力を持つ・・・15歳くらいの』

そのまま、俺が腹を殴り、気絶させ、盗まれた鞆を取る。

『あつ！あの、ありがとうございます！』

後ろから声がかかったので、振り向くと長くきれいな銀色の髪が頭から垂れている、同じ

くらいの年の女の子が頭を下げていた。

『これ、次からは気をつけろよ。』

俺は男から取り出した鞆を返した。

『ありがとうございます』

再びあやまれ、女の子は顔を上げた。銀色の髪に似合った、白いきれいな肌に、整った顔、間違いなく美少女だろう。

『ああ、いいよ。これくらい当然だろ。あつそうだ。俺は如月キリト。よろしく。』

自己紹介をした。

『わたしは、スノウといいます。よろしくお願いします。』

スノウという女の子も礼儀正しく自己紹介してくれた。

『あの、お礼とかしたいんですけど、昼はなにか食べました？』

スノウという、女の子はそう訊いてきた。

『ただけど・・・』

『じゃあ、あちらの店でたべませんか？』

『いいの？俺、あまりお金とかもってないけど』

『大丈夫ですよ、今日のお礼です』

そういつてスノウは俺を連れて店に向かう。

けっこうたかそうな店だ。

『キリトさんはなにをたべますか？』

『え？うーん、なんでもいいよ』

料理の名前をみてもわかるものが無かった。

多分、地元では有名なものだろう

『じゃあこれにしよう』

そういつてスノウは料理をたのんだ。

『キリトさんはなんでここにきたんですか？』

スノウは訊いてきた。

『えーと、たしかアブソリュート学院の入学式とかで』

『え！ キリトさんもその学校なんですか？』

スノウは驚いた様子だった。

『そういうことはスノウもこの学校なの？』

『はい、この学校だよ、驚いたなあ〜キリトさんもこの学校だったんだ』

なぜかスノウはうれしそうだ。

『スノウも新入生だろ？一緒にいかないか？』

『ごめんなさい。あの、まだ今日は用事があるので行かないんです』

『入学式は今日だよ？』

俺は訊いた。

『はい、1週間後のテストの日に行くと思います。』

『そうなんだ、今日はありがとう。』

そういつて、俺は席を立った。

『いえ、こちらこそありがとうございました』

『じゃあ、一週間後テストでな』

そういつて俺はすぐに店を出た。

『あと3時間くらいか・・・』

『じゃあ、学院にいきますか。』

『はい。』

感情のこもっていない言葉。

俺の肩から急に出てきた生き物。少し狐に似ている。その生き物が返事をしたのだ。

『おいおい、あまり出るなつていったら』

俺は呆れながらいった。

『今は誰もいませんから、大丈夫です』

『今日の、入学式では出ないでくれよ。』

『はい、了解しました。』

俺の金色の毛並みをした狐みたいな生き物、ララは返事をした。

この生き物は、ドールと呼ばれる。異能の力や魔法の力とは別の力でできた生き物だ。

ドール使いは生まれた時からドールを呼び出すことができる。

異能者よりもそのドールを操れる人は少ない。

そして、学院へと、足を向かわせた。

第3話（前書き）

再びの投稿です。

感想などをお待ちしています。

最後までご覧ください。

第3話

俺は黒、一色な部屋にいる。それもベッドの上だ。

現在は、午前10時。大体の人は外に出たりするだろう。ほかの人は、部屋に昼までいることがあると思う。

俺は後の方。最近は早く寝て、遅くまで寝ている。昔は早寝早起きだった。

そして、今日は早く？起きてしまった。

ベッドの上において3分ばーっとした後、顔を洗い、いつもの黒いコートを着た。その後、朝食を作るためにキッチンへ行く。

ピンポーン、ピンポーン。

そんな中、突然チャイムがなったのに驚いた。

『だれだ？仕方ない出るか』

作り終えたものを皿に移し、早速、玄関へ向かう。

『おはよう、あつ。良いにおいだね。如月クンも料理一人でするんだ。なんか意外かも』

ドアを開けた後、見たのは俺の部屋の隣に住んでいる住人、カレンだ。

薄いピンクのショートヘアがとても似合っている。

『ああ。おはよう。何か用か？』

俺は、素っ気なく挨拶をして用事を聞いた。

『うん。如月クンってもう学校の周りとかって見たりしたのかなあ
って思ってた』

カレンは、そう答えてきた。

『いや、ただだけど。』

『よかった。ならさ。一緒に行かない？一人で行くのもなんかつまらないとおもったから、いいかな？』

カレンは身長的に上目遣いなるで聞いてきた。

『え！？・・・いいよ。じゃあ、昼からでいいかな。1時頃に寮の前に集合で。』

『よかった。ありがとう。じゃあ、昼からね。』

そういうと、カレンは俺の部屋から出て行った。

俺は少し、どきどきしていた。あまりこういう風に話したことがなかったからだ。

俺も玄関から離れ、朝食を食べ始めた。

俺は、部屋から出ることもなく、黒のベッドにで横になっていた。

時計の針がちょうど12時半を示していた。俺は、外の空気を吸うために30分早く、寮の前に向かった。そこには、まだカレンはまだ来ていなかった。立っているのも疲れるので、寮の前のベンチに腰をおろし、カレンが来るのを待った。

ああ、暇だ・・・空を見ながら。

ベンチで待っているとそこに、カレンではない男が立っていた。

男は俺よりも少し小さい身長だとおもう。

『もしかして、新入生？？』

男は少し高い声で聞いてきた。

男は、茶髪でショート髪が地球の重力に逆らったように逆立っている。

『新入生、如月キリトだ。あんたも新入生か？』

『そうだけ。俺は武藤カズヤ。お前はここの寮に住んでんのか。俺は隣の寮だ。』

『へえ。寮ってたくさんあるんだな。』

そういつて、まわりを見渡す。

俺がいままでいた寮と同じような建物がおおく存在していた。きずかなかった。

いや、あまり周りをみていなかったかもしれない。

『お前、きずかなかったのかよ。寮は10個あるんだぜ。ひとつひとつにマークがついているだろ。星のマークや太陽のマーク、その色違いとかあるぜ。』

カズヤは自慢げに話す。

俺は自分の寮を見上げると、真つ赤な太陽のマークが飾ってある。『キリトっていったな、キリトもけっこう強そうだな。まったく隙がないな』

『そうか？ただベンチで座ってるだけだろ？』

『それもそうだな』

そういつて武藤カズヤはわらった。

すると、寮の玄関から人が出てきた。カレンだ。走ってこちらへ向かってくる。

『ごめん。待った？』

『まあ。暇だったしな。』

俺はベンチから立ち上がった。

『じゃあな。同じクラスになるといいな。たしかクラスは実力順でAからDってクラスは決まってるらしいぜ。まあがんばれよ。』

そう言つてカズヤは走つて寮に向かつて行った。

『あれ？あの人って知り合いなの？』

カレンは不思議そうに聞いてきた。

『いや、さっきここであつたばかりだよ。』

『そうなんだ、それじゃあ、行こっ！』

カレンは俺のコートをひっぱつて学院に向かう。

3分後・・・

やはり、何度見ても感心してしまうほどに校門は大きいと思う。入学式にも思つたが、校門を抜けると、更に大きい建物。アブソリユート学院がある。

俺とカレンは、校舎の周りを見渡しながら歩く。

入学式の際は新入生が多く、あまりわからなかったが、今こうしてみると大きいのが、すぐのわかる。

さすが、大陸1位の实力を持つエリート学院だな。などと考えてしまう。

学院の中に今日は入れないため学院の外を回っている。広い土地の中央にあるのは校舎だろう。校舎の真ん中。らしきところから100mくらいの高さの円柱のようなものが、そびえ立っている。

おそらく、生徒会長の部屋や校長などの偉い人がいるのだろう。多分、俺が、行くことはないだろう。

校舎のまわりには、大きい訓練場、入学式をやったところや、訓練に必要な施設が揃っている。やはり、訓練でも、危険なんだろうな。

つい、感心していると声が漏れてしまった。

『すげーな。』

カレンはそれを聞いて、少し頷いた。

『ここが、次から通うところだね。』当たり前のことカレンが聞く。

『そうだよ。でも、あまり実感わかないよな。』

それは、俺は学校というものに通ったことがないからかもしれない。

俺はいままで、4つの大陸の西大陸にいたからだ。そこはいまだに、紛争や争いがあったからだ。最近政府、ガーディアンの圧力により、すこしずつ収まりつつある。

『あそこすごいとかいよ?』

カレンはさっき俺が見ていたところ指差していた。

『ほんと。すごいよなこの学校・・・』

校舎の周りを歩くだけでも1時間もかかった。それほど広い。俺とカレンは会話をしつつ再び、学院の玄関に戻ってきていた。

『ふうー。やっと回り終わったね。結構、つかれたなあ。』

カレンは歩くのに疲れた様子だった。

俺はコートに隠れていた、黒い腕時計をみた。針は少しずつ時を刻む。

時刻は現在2時半だ。

『ねえ。これからさ、街のほうに行かない？』

カレンは聞いてきた。

『どうして？』

『ほら。次って、クラス分けテストだよな、それで、武器を買っておかないと・・・君は武器は持ってないようだけど、もしかして素手で戦うとか、魔法だけで？』

『いや、ちゃんと武器はつかうよ、もちろん。まあ暇だから、街にいてもいいよ。』

『ありがとう。如月くん。いまからだバスとかあるよね。』

『うん。たしか、バスは通ってたと思う』

あやふやな答え返した。

『で？どこの街にいくの？』俺は聞いた。

カレンは少し悩んで答えた。

『うーんと、たしか武器は・・・ヒストリア区にいい武器が売ってる聞いたことあるよ』

『そっか、じゃあ早速行こうか。』

俺とカレンはバス停に向かって歩いた。

俺とカレンはバスに乗り、ヒストリア区へと向かった。

『ここってたしか、春でも暑いけどその服で大丈夫なの？』

カレンは俺のコートを見ていつてきた。

心配そうに聞いてくる。

『ん、大丈夫だよ。』そう答えるともうついたらしくバスは止まっていた。

俺は、バスを降り、カレンと武器を買いに歩く。

ヒステリア区。

有名な武器屋通り。右、左をみても武器が売られている。ここに買いに来る人は多いようだ。

現にたくさん武器を求めている人でいっぱいだ。

店には、きれいに整備された銃や剣、槍など武器が置いてある。中には最近、作られ始めた、魔力を流すことで本来の武器の重みや形が再現される武器までも置いてある。

俺も、アブソリュート学院に来る前にそれをもった泥棒を気絶させたこともある。この武器は、魔法具と呼ばれている。長所として、魔宝具は復元しないと相手にどのような武器かをわからせないようにできる。ことらしい。

さつき看板に書いてあった。

『いっぱい武器あるねえ』

カレンもまわりをみて、言った。

『なあ、カレンはどういう武器を使うんだ？』

俺は、気になったので聞いた。

『うーんと。あまり武器とかは使わないんだけど、近接格闘もできる短銃をひとつ買おうかなっておもってるよ。』

『銃術？』

『へえ。意外と詳しいんだね。お父さんも銃術をつかうから、少し教えてもらったんだ。』喜びながら、カレンは言った。

魔法が普通の現代でも、銃というのは、たしかに強い。

魔法で銃を防ぐのは、なかなか難しい。

『じゃあ、武器、選ぶうか。』

俺は銃を見た。俺は銃の知識は聞いたことはあるが、カレンはどれがいいのか、実際撃たなければ、見ただけではわからない。

しかし、カレンは、銃を触り、重さや銃弾の大きさなどをチェック

クしている。これほど真剣なカレンは初めて見た。カレンは、銃をえらんだらしい。

白と赤の色を使っている銃だ。制服の色に似ている。

はつきり言っ目立ちすぎる銃だ。銃弾は9mm。数は15発。魔力を込めて放つことも可能な改造された銃だ。

『どうかな。この銃？』

カレンは銃をもって俺に渡してきた。

カレンから銃を受け取った。重さは少し重い。確かに、遠距離、近距離による戦闘にも対応できそうだ。

しかし、俺は思ったことを言った。

『この色って何とかならないのか？これだと目立ちすぎだろ？』

『えーっ！この白色と赤色がいいんだよ。』

否定されたのが、悲しかったのか、少し落ち込んでいる。

『ごめん、ごめん。うん。いいと思うよ』

『そうだよね、うん。じゃあこれにしよう！』

カレンは、短銃をもって、買いに行った。

ドオオオオオン！！！！

カレンが買って戻ってきた直後、おおきな爆発音が起きた。

『え？？どうしたのこの音！』

『近くで魔法による攻撃があったらしいな』俺は答えた。

『ねえ。なんか面白そうだし、いってみよう！』

そういつて走り出したので、俺も後を追う。

あの、爆発音。上位魔法による攻撃か。結構な音だったな・・・
おれは、咄嗟にそう考えた。

第4話（前書き）

更新です。

最後まで読んでくれるとありがたいです。

第4話

『ふははははあゝは。』

爆発を起こしたらしき人が笑いながら立っている。

その爆発は、魔法のものではないことにきずいた。

男の顔を見たことがある。西大陸の指名手配書に描き出された顔。それに、すごい似ている。

銀色の髪、ひげも生えている。たしか40歳を超えている。腕には筋肉がかなりついてい

るのが遠目からでもわかった。魔力も体からあふれ出ている。

そいつの名は・・・爆弾使いのギース。

爆弾を使って多くの命を奪った殺人者だ。

あまりにも、神出鬼没でヴァルキリーでも、捕まえることは困難らしい。爆弾以外にも、

手につけている魔宝具、クローを持っている。その実力も高い。

そのため、捕まえるのは難しいのだと思う。

俺がそこまでわかったのは、死体の中には、ヴァルキリーや普通に暮らしていた市民も含

まれている。

『おいおい、嘘だろ。ここまで弱いのかよ。クククッ』

奴は異能者か。手から魔力を込めることによって爆弾を作り出すことができる。

そんなところの能力だろうな。

そこまで、知っていて。ヴァルキリーまでも殺されたなか、反抗するものは普通はでない

。俺も、あまり無駄な戦いはしたくない。相手が異能者で強敵なら、なおさらだ。

バン。

俺のすぐ近く。そこから、一発の銃声が鳴り、高速の一発の銃弾が飛んでいくのがわかつ

た。

それは、カレンがさっき買ったばかりの銃だった。

俺はカレンの顔を見たが、すぐに逸らし、銃弾を追い、ギースを見た。

その銃弾はギースの心臓に、しっかりと向けられて放たれていた。距離、15 m。

ギースも驚愕の顔を浮かべ、再び、笑ったように見えた。

それに対し、ギースはすぐに魔法具の右手のクローを復元し、銃弾を受け止めた。

カレンも驚いた、しかし、もう一回、銃を構え、すぐに撃つ。撃つ。撃つ。

1回とめられてから、3発撃つたのがわかった。

それも正確に脳天、心臓、腹に目掛けて、放たれた。それには、魔力が込められていた。

それにより、さっきよりも威力は増すはずだ。

ギースは左手のクローも復元し、3つの銃弾を受け止めるため、構えた。

バキン、バキン、バキン。

しかし・・・

ギースは再び、3発を防いで見せたのだ。

『うそっ！・・・』カレンは銃を構えたまま、驚いて硬直している。それはそうだ、完璧なまでの射撃。それを何の苦もなく、防いだのだから。

ギースは強い。それは、カレンもわかっただろう。

『ふははははっ。傑作だ。そんなに死にたいのか？クククっ』
くるってる。俺はそう思った直後、ギースがこちらに飛び出して
いた。

『ちっ、クソ！』俺は左に飛んだ。

しかし、硬直していたカレンの方へ飛んできていることに気づかなかった。

俺は、叫んだ。

『カレンっ！！右に避ける！』

しかし、カレンには届かなかった・・・

『クソっ。闇を！』俺は手を宙に出し、3つの重なった魔方陣を即座に作り出す。

黒いまっすぐに伸びる闇のビームがギースに飛んでいく。

ギースはそれに気づき、防げないとわかったのか、後ろへ再び飛び、元の位置に着く。

俺はカレンの元へ走った。

『ごめん、如月くん。迷惑かけて。』声を聞き少し、泣いているのがわかる。

『大丈夫だ、心配するな。』

俺は、やさしく微笑んで言った。

『俺達は、絶対に負けない。俺を信じろ！』
そついうと、ギースをみた

ギースは俺を見て、言った。顔に笑いを浮かべ、

『よう！黒い死神さん。クククツ、あんただろ。4大陸で最も強い異能者や魔法使いが荒れ

狂う西大陸で黒いコートに黒いズボン、手袋にピアスで違法者の始末していった。最初に見

たときからそうだろうとは思っていた。黒い死神！！！！』

ギースは挑発するように言った。こいつも西大陸にいたのか・・・しかし、この挑発には乗らない。

『あんたは、黒い死神を見たことがあるのか？』

『クククツ。はーははは。おもしろいな、お前。見た奴はたくさんいるんだぜ。』

『黙れ！』

そういつて俺はギースに向けてとんだ。

奴の能力はたしかに最強だ。ただし、爆弾を作るのにはかなりの時間がかかる。

その隙を作らなければ問題はない。

俺はコートの中で刀を作り出す。それを下段で構え、下段からの切り上げをした。

『甘い・・・』

ギースはクローで下段からの切り上げを防ぐ。

そのもうひとつのクローが俺に向けられ、中段から横に切るようだ。

『残念だな・・・』

俺はそう言い放つと同時に俺に向けられていたクローをクサリで防ぐ。このクサリはコー

トの下から魔力で操作している。

『隠し武器か・・・こざかしい』

ギースはクローを捨てた。いい判断だ。

俺に刀を防いでいたクローの力が強まる。魔力による身体強化・・・。

俺はすぐに後ろへ下がる。つよいな・・・

しかたない、光の魔法か。目くらまし。俺はすぐに指に魔法陣を組み立てる。

『フラッシュ！』

俺の指から光が輝く。それは相手の視界を奪う。

『くそっ、ふざけやがって・・・』

ギースもこれにはさすがに喰らうだろう。

俺は魔力で宙に浮く。これは多分俺にしかできない芸当だ。魔力で浮くにはかなりの魔力

が必要となるからだ。

空気の流れを読ませない。もちろん足音も・・・

これが殺しの、暗殺の基本だ。

俺は刀を峰で構える。

俺はギースに近づく。そして鳩尾に刀の峰で思いつきり打つ。

『くっ・・・』

さすがに効いたようだ。

『そこか！！』

ギースはこれを狙っていたのか？俺の攻撃の直後、クローで俺の腹を切り捨てた。

『うあ！』俺は避けることができなかった。

『そのコート・・・切れていない？・・・』

『残念だな、その程度じゃ切れない』

俺はすぐに地面から立ち上がる。

『気づいてないのか？』

俺がそういうとギースは自分の体を見る。

『なっ！いつの間に・・・』

ギースのクローはすべてヒビが入っている、そしてさっきの攻撃で完全に形をなくしていた。

た。

体にはひとつのクサリで巻かれていた。いや、今巻きつけたのだ。残念だったな。チェックメイトだ・・・』

クサリに最大の魔力を込め締め付ける。

どんな奴でも完全に骨を砕く。締め付けられれば俺の勝ちだ。スネイクチェインこれが俺の最大の武器だ。

カレンがこちらへ急いで、来る。

しかし、だんだんと視界が遠ざかっていく・・・

『如月クン！如月クン。・・・』

カレンが俺を・・・抱きしめたのか。

いや、よくわからなかった。そして、倒れた。

俺が学園に行くことになったのは1週間前。

俺は人を殺すのに嫌気がさしていた。

俺は西大陸の大きな山の頂上の大きな木の下にいた。

そんなときに声がかけられた。

女性だった。茶色のロングストレート。俺よりも少し年上だと思う。

身長は165cm。結

構、スタイルがいい。赤と白の服を着ている。

『ねえ。あなた、黒の死神をしらない？』

俺はそんなことを訊かれた。

『さあな。』

『そう、知らないのね？』

『ああ。』

しかし、その女性は近づいてきた。

『本当に知らないのね？』

更に近づいてきた。

『黒の死神ってあなたでしょ？』

『そうだったらどうする？』

俺も質問で返した。

『おもしろいね。じゃあ、君の名前は？』

俺は無視した。

『私はアスハ。君の名前は？』

『如月キリトだ。』

『もう一回訊くよ？君が黒の死神なんだよね？』

『いいかげんしつこい！ああ！そうだ俺が黒の死神だ！それがどうした？』

俺はアスハを睨んだ。

『やっぱりね』

アスハは笑った。

『なら勝負をしよう！』

『勝負？』

『うん。魔法も異能の力も使わないで勝負』

『ふん。ただの学生が・・・』

『なんで学生ってわかったの？』

『さあな』

アスハは剣をとった。

『ほんとうに戦うのか？』

今度は俺が質問した。

『もちろん、本気でいくよ。魔法はなしだからね。君の武器は？』
俺は袖からナイフを取り出す。

『え、嘘でしょ？ナイフで？』

『これで十分だ・・・』

『それでいいの？途中で違う武器はだめだよ？』

『じゃあいくよ！』

アスハはそういつて剣を構える。

俺はただの仁王立ちでナイフを中段で構える

5秒間、構えたままにいる。

最初に動いたのはアスハだ。アスハは剣を横に振るう。その動きには無駄がまったく無か

った。

だが、俺はその攻撃を読んでた。それを後ろに避ける。さらにアスハは攻撃を続ける。

切り上げだ、しかし俺は横に避ける。次は横に避けた俺に対して、突き放つ。俺は再び、後

ろにギリギリでかわす。

アスハの剣は俺に掠りもしない。

『どうした？それだけか？』

『そつちこそ、避けてばかりじゃ勝てないよ！』

再び、アスハは距離を詰める。

再び、攻撃する。行動がマイパターンだ、読みやすい。

アスハが剣を俺に向けて、切りつけようとする。それは上段からの攻撃。

俺はその上段からの剣に対し、ナイフで切りつける。それにより、アスハの剣の軌道がず

れ、重心が傾くのがわかった。アスハが足を崩し、体勢を少し崩す。その隙に、俺はアスハの靴を蹴る。

『え？・・・』

それでバランスを完全に崩し、地面にお尻から倒れた。

俺はナイフを倒れているアスハに向ける。

『強いね、噂以上に。』

『これで終わりだな・・・』

そういつて俺はナイフを袖の中にしまい、山を下山しようとした。

『ねえ！学校に、学校に来ない？』

俺は足を止めた。

『学校に？』

『うん、学校だよ』

『本当にか？』

『そうだよ、スカウトにきたんだよ』

『行きたい、学校に行きたい！』

俺はアスハに向けていった。

『ヴァルキリーを育成する学校だけどいい？』

『ああ。どこでも構わない。ただ暇つぶしができれば・・・』

『いいよ、ならここに入学証明書があるから、出しておくよ。これが学校への地図だよ、じ』

やあね。』

そういつて風の魔法で飛んでいった。

飛んでいるアスハを見ていった。

『学校か・・・行ったことないけど楽しそうだ』

そういつて、北大陸に足を運んだ・・・

第4話（後書き）

最後まで読んでいただき感謝する、しますWWW
次も頑張って更新します

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1965p/>

黒の死神

2010年12月2日16時10分発行